

# 2022年 9月18日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

## 詩編 121編 「わたしの助けは来る」 高橋彰

### 121 |【都に上る歌。】

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。

わたしの助けはどこから来るのか。

### 2 わたしの助けは来る

天地を造られた主のもとから。

### 3 どうか、主があなたを助けて

足がよろめかないようにし

まどろむことなく見守ってくださるように。

### 4 見よ、イスラエルを見守る方は

まどろむことなく、眠ることもない。

5 主はあなたを見守る方

あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。

6 昼、太陽はあなたを撃つことがなく

夜、月もあなたを撃つことがない。

7 主がすべての災いを遠ざけて

あなたを見守り

あなたの魂を見守ってくださるように。

8 あなたの出で立つのも帰るのも

主が見守ってくださるように。

今も、そしてとこしえに。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

先月取り上げた 120 編に続いて、「巡礼歌集」(120-134 編)の中の詩です。

旅立ちの歌のようです。時や場所、状況や詩人の背景などは詳しく語られていません。あえてそうすることで、この詩にふれるわたしたち一人一人の人生の状況にシンクロさせる効果を生じさせているかのようです。そのようにして多くの人びとに親しまれてきました。この詩編を元に日本で作られた讚美歌「山べにむかいて」も愛唱されてきました。

構造を見ると、2つの部分に分かれます。1,2節は「わたし」が主語になっています。「わたし」は視線を上げて山々を見上げます。これからの旅路を思えば、あの山々を超えてゆくために危険や苦難も想像されます。うなだれてうつむきそうな心を奮い立たせて目を上げてそびえる山々を見上げ、わたしへの助けがどこから来るのかと問うのです。そして自ら2節で信仰の告白をしています。「わたしの助けは来る」と。「天地を造られた主」という告白は、まだ見えぬ山の向こう側も、これから起こる出来事全ても、主なる神のみ手の中にあると信じることです。その神への信頼が未知の道のりに希望をもって出発する力になるのです。

その信仰告白に応答するように、3-8節「主」が主語になっている。祭司が祝福の言葉をかけていると読むこともできます。そうであれば、エルサレムの都、神殿参りへの出発ではなく、神殿で祈りをささげた後、そこで受けた祝福や喜びゆえに神の助けを信じて告白し、神殿から出発する旅立ちの場面を描いているとも言えます。詩人の告白に対して、祭司は祝福と

神の臨在を伝えます。旅路の不安を覚える「わたし」の不安を打ち消すように、「よろめかない」「まどろむことない」「眠ることがない」「撃つことがない」と、「～しない」という言葉を6回重ねます。そして、「見守る」という言葉も6回繰り返されます。主は撃つ(=裁く)という方法で力を示される方ではなく、守ることによってご自身を現わされる方だと宣言されます。

さらに主は「眠らない」方だと言われます。昼も夜も、そして季節が移り替わろうとも、常に変わらずに造られたものに目を注ぎ、守られる方なのです。季節によって力を振るったり眠ったりするように語られた、周辺の民が崇めた土地の豊穡の神々との違いを表してもいます。太陽の灼熱に力を奪われず、月夜も不安や幻想を呼び起こし、惑わすものとはならないのです。見守る方に促されて、神殿から出発します。神のもとからの出発はまた同時に神へと向かう旅路でもありました。

預言者イザヤは主が来られるのに「山と丘は身を低くせよ。」(イザヤ40:4)と預言しました。わたしの前にそびえる山々が移されるように主が道を造られると信じて祈り、語った預言に励まされて、捕囚の民はバビロンの都からエルサレムへの帰還の道を歩み始めました。

エルサレムへ神を礼拝しに来たが、異邦人の庭から神殿を仰ぐしかできなかったエチオピアの宦官は、イザヤ書の巻物を手に入れ、帰る道のりでも主イエスを信じる弟子のフィリポに出会い、自分を見守り支える救い主イエスについて知り、バプテスマを受けました。そして喜びにあふれて旅をつづけました。

#### 【使徒言行録 8章】

26 さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。29 すると、「霊」がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりますか」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。32 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。「彼は、羊のように屠場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」

34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」35 そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」37 38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。39 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。40 フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。